

# 祈りと鎮魂 — 柵瀬茉莉子の縫いの所作

片多祐子

柵瀬茉莉子は、一貫して「縫う」手法にこだわってきた。「縫う」という言葉が古くは万葉集にも登場し、私たちの暮らしと密接な関係にあることは今更強調するまでもないだろう。そしてその行為には、布や皮を針で刺し綴り、衣服や器物を形作る、あるいは飾るという実利的な面だけでなく、千人針のように祈念の手法としての一面もある。では柵瀬にとって縫うという行為は、どのような意味を持つであろうか。

柵瀬は、三浦半島西海岸の中央部に位置する佐島で生まれた。佐島は、半農半漁の生活を支える漁港と、1965年創業のマリーナがある海と山に囲まれた風光明媚な土地だ。幼い時から彼女はここで、「佐島の丘」頂上より自然豊かな風景を眺めていたという。また彼女は2歳半より母と別れて暮らしたことで、祖母や近所に住む小母さんからの愛情を人一倍受けて育った。そして、祖母の針仕事を間近にみてきたことが、

この作家の原点となった。

同地では開発計画の賛否が長らく議論された後、2000年に横須賀市によって「リゾート感あふれる健康と文化の交流拠点及び閑静な住環境」を目指す「佐島の丘地区地区計画」\*が施行された。それにより緑あふれる景観のなかに、明らかに異質な人工物が次々と出現した。その目覚ましい変貌を目の当たりにするなかで、自然の豊かさとともに、人間の営為により失われる儂さのちへの共感が、柵瀬の創作の基盤を作った。

最初期の作品《葉っぱのかさぶた》(No.1)は、作家が当時在籍していた大学で自殺者が出たという報せを聞き、消えたいのちへと思いを寄せ、構内の椎の葉を赤い糸で日々縫いこんだ作品だ。その延長線上に、木にボール盤でひとつずつ穴を開け、その穴を金糸で縫い取る「木を縫う」シリーズ(Nos.2~14)が生まれた。

これらの作品において、ひと針ずつ生み出された縫い目は、実利的な用途や目的を持つものではなく、また素材の表面的な装飾でもない。それは、作家の手の痕跡や、縫う行為が営まれた時の経過を感じさせ、その素材がもつ時間の記憶を可視化する役割を担わされている。また近年作家が参加した「蚊帳の家プロジェクト」(Nos.14~17, M-1~M-4)で実現されたように、その縫い目は時に、人と人との結びつきや、異なる時間軸をも繋ぎとめてゆく。

しかし彼女の縫い目は、そうした創作の意図を超えた意味を纏っているように感じられた。それは、2019年1月10日に柵瀬が祖母をなくしたことで、より強く作品にあらわれるようになった。彼女は祖母の死を悼み、《いとの日-2》(No.18)において、形見のトレーナーに、祖母の髪の毛、飼い猫の毛や庭の植物などを縫いこんだ。一方で彼女のこうした縫いの所作は、大切な家族との別

れに限られたものではない。たとえば本展準備中には台風19号が上陸し多くの川が氾濫したが、彼女はこの夜にも川の氾濫で被害を受けた人々に思いを馳せ、針を進め続けていたという。

柵瀬にとって、素材選びやそこに施す針仕事は、常に必然的な選択の集積であり、彼女の人生そのものでもある。日常生活のあらゆる場面で生じる、儂さのちへと寄せた密やかな思いと営みが作品に形を与えているのであり、彼女にとっての縫う行為とは、生きるものと朽ちてゆくものへの祈りと鎮魂の所作に他ならない。こうした作家の思いを繋ぎとめている縫い目こそが、道端に落ちていたら気に留めないような素材に新たないのちを吹き込み、観るものを惹き付けるのであろう。これから先も彼女自身のいのちの物語が紡がれてゆく過程で、どのような縫いの作品が刺し綴られ、産み落とされてゆくのか目が離せないでいる。